学術部おすすめ！読んでおきたい特集記事

デンタルダイヤモンド／2016．1月号（中島副委員長 記）

○2020年歯科医療シュミレーションマップ（中原　貴・木ノ本喜史・江口康久万・松永興昌）

＊映画「バック・トゥ・フューチャーPart２」が描いた未来は、2015年であった。空飛ぶデロリアンはまただけど、腕時計で通信するなど少しずつ未来社会は実現している。臨床・研究の最前線で活躍する4名に2020年の歯科医療の未来を占っていただいた。①バイオ再生医療は歯科に新風を吹き込むか？（日本歯科大学生命歯学部　発生・再生医療学講座、中原貴）：再生医療は大きく分けて①iPS細胞やES細胞を使うもの②骨髄や歯などの組織幹細胞を使うもの③脂肪やPRPを使うもの分けられる。2020年には将来の再生医療のための歯髄のバンクが一般化し、コンビニより多い歯科医院は歯髄バンクの窓口として新たな歯科医療を提供しているかもしれない。②歯内療法はどこまで進化するのか？（きのもと歯科・大阪大学大学院臨床教授、木ノ本喜史）：最近の30年で大きく進歩した歯内療法であるが以下の分野で更なる進歩が期待される。１）歯髄診断の客観性の確立　２）CBCTの読影　３）歯髄の再生　４）㋐生活歯髄療法　５）歯髄腔の形態に沿った根管拡大・形成法　６）効率的な根管洗浄　７）シーラーの進化　８）支台築造　９）非歯原性疼痛の鑑別診断　10）神経障害性疼痛　11）根尖孔外バイオフィルム　12）歯の破折への対応　今の勢いでエンドが進歩してほしいとしている。③子どものう蝕はゼロになるか？（江口歯科・矯正、江口康久万）子供のDMFTは大きく減少しているが、科学的にみると下顎の６７が多い。６は親が７は子ども自身が守るべきであるが、学校歯科医の果たす役割が大きく、その努力によって2020年にはＤＭＦＴは0.5ぐらいになっているかもしれない。④インプラント周囲炎の治療法は確立するのか？（松永歯科クリニック・松永興昌）：インプラント周囲炎の予防で重要なことは、埋入位置である。今後はコンピューターシュミレーションやガイデッドサージェリーで、インプラント周囲炎になりにくい位置での埋入が行われることで、その予防になるとしている。
デンタルダイヤモンドでは６つの新しい連載が始まりました。表題を記載しておきます。
①超高齢社会を見据えた歯周治療のベーシック＆トレンド（和泉雄一・秋月達也）
②失敗症例から学ぶインプラントのクライテリア（竹下賢仁）
③若手必見！患者さんから選ばれる歯科医師になろう（友松政由紀）
④クボタ式活きるお金の運用・管理（久保田智也）
⑤ストーリーから学ぶ咬合違和感症候群（島田　淳）
⑥私のスキルアップ作法（伊藤創平）　　どれも、始まったばかりですが、わくわくするテーマです。

歯界展望／2016．1月号（小野委員長 記）

○特集／クラックトゥースへの対応（大阪府開業　牛窪敏博　渡邊浩幸）

＊修復治療や根管治療で遭遇するクラックトゥースは、抜歯に至る可能性もあることから、治療計画の変更等、頭を悩まされることが多い。今回、この生じる要因や症状、発生部位、診査から対応とその予後についてまで、有髄歯と根管治療歯に分けて解説している。

○新連載　―小児歯科臨床Q&A―診療所に小児患者がやってきたら
（井上美津子　田中栄一　藤岡万里）

＊これからの一年間の連載だそうだ。昭和の終わりの「虫歯の洪水」の時代から、虫歯がある小児が珍しい時代になり、それに加えて急激に少子高齢化がすすんだ現代、小児患者の治療がかなり減少している事に改めて気が付いた。また「保護者との関わり」とか「ネット情報や“ママ友”情報に振り回される親御さんへの説明」など、現代の小児歯科事情にも触れていて興味深い。今回は、「酸蝕症」について述べている。

ザ・クインテッセンス／2016．1月号（岡崎副委員長 記）

○“今”知っておきたいキーワード　フレイル（渡邊　裕）

＊Frailty(フレイリティ)は当初「虚弱」と訳されていたが、2014年に老年医学学会が、適切な対応により再び健常な状態に戻る可逆性を包含していないことと多面的な要素を十分に表現できていないことから「フレイル」となった。つまり生理的予備機能が低下することによりさまざまなストレスに対する脆弱性が亢進し、生活機能障害、要介護状態、死亡などに陥りやすい状態になり、また、筋力の低下から動作の俊敏性が失われて転倒しやすくなるような身体的問題のみならず、認知機能障害やうつなどの精神・心理的問題、独居や経済的困窮などの社会問題を含む概念である。日本歯科医師会も2015年に「オーラルフレイル」を新たな国民運動として展開させている。後期高齢者の滑舌の衰え、食べこぼし、わずかのむせ、噛めない食品の増加などのささいな“口の衰え”が全身の衰えと大きくかかわっていることにいつも配慮する必要がある。

○かかりつけ歯科医と咬合誘導　その意義と限界を知る（須貝昭弘　関崎和夫）

＊かかりつけ歯科医師として、「う蝕予防」「歯周病予防」プラス「歯並びもよくしている」という形で、子どもたちの成長を見ながら、歯科医院も家族もゆとりをもって予防していくことが理想であり、咬合誘導は、生涯メインテナンスを始めるきっかけとなる重要なポイントだと述べている。本文より、関崎「子どもたちを診る機会が多いかかりつけ歯科医こそ、不正咬合の“芽”を見つけられますし、適切な時期に適切な対応ができると思います。う蝕のない健全な永久歯列の美しさ以上のものはありません」、須貝「子どもたちはどの歯科医院で治療を行っても、きれいな歯列になる可能性があります。患者さんとずっとかかわり続けている歯科という職種は、本当に責任とやりがいのある仕事だと思います」多くの臨床例で解説され、専門医との連携についてもふれている。

歯科評論／2016．1月号（居樹副委員長 記）

○特集　臨床研修世代のいま―理想と現実の姿（福場駿介・小島　丈　他）

＊平成18年歯科医師臨床研修が必須化となり９年が経過しました。現在は当然のように行われている臨床研修制度もいろいろな問題点や課題があるようです。我々のほとんどが臨床研修を知らない世代だと思います。これから世の中に出てくる若い世代の歯科医師がどのような教育を受け、そしてどのように臨床に取り組んでいっているのか。理解をする上で良い特集だと思います。是非ご一読してください。

○新連載　目指せ！“気持ちイイ”補綴物―クラウン・ブリッジの適合誤差を少なくするコツ
第1回“気持ちイイ”補綴物って？（吉田秀人・高田亥三男）

＊「気持ちイイ補綴物」入れてますか？吉田先生によると「気持ちイイ補綴物」とは装着時に調整がほとんど必要なく、ピッタリ入る補綴物のことを指すそうです。アンケート調査によるとブリッジにおいてはほとんど調整せずに気持ちよく入ったのはわずか３％とのこと。これから４回に分けて「気持ちイイ補綴物」にする極意を解説します。第１回は歯科技工士さんとの”キモチ”の共有が大切ということ。とっても楽しみな連載です！